

Title	経営経済学の方法と課題
Sub Title	Methods and problems of German business administration
Author	榊原, 研互(Sakakibara, Kengo)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2024
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.67, No.3 (2024. 8) ,p.3- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	榊原研互教授・岡本大輔教授 退任記念号 講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20240800-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演録

経営経済学の方法と課題^{*}

榊 原 研 互

1. はじめに

本日は年度末のお忙しい時期にもかかわらず、私の最終講義にお集まりくださり、どうもありがとうございます。

ただ今、岡本学部長からご丁寧なご紹介をいただきました。岡本先生、どうもありがとうございます。お話にもありましたように、岡本先生とのお付き合いは、助手時代からかれこれ40年になりますが、公私にわたって本当にお世話になりました。

また、司会の平野先生をはじめ、会場の設営などさまざまな準備に奔走してくださった学部運営委員の先生方、秘書室のみなさま、そしてゼミの卒業生、現役生のみなさんにも、心から御礼を申し上げたいと思います。

なお、私のゼミの卒業生は、今年卒業する28期生も含めて総勢393名になりますが、今日はその3分の1が来てくれました。本当にありがたいことだと思っています。

さて、本題に入る前に、本日の最終講義をこの教室（西校舎526教室）で開催することにした理由を手短にお話しておきたいと思います。

私は長らく「経営学説史」（新学則では「マネジメント各論（理論史）」、「マネジメント各論（方法論史）」という名称になっています）という授業を担当してきましたが、これはもともと恩師の小島三郎先生が担当されていた科目でした。私が助手に任用された当時、小島先生は学部長として大変お忙しい毎日を過ごしておられたのですが、私が助手となって2年目のある日、丁度三田祭のころだったと記憶していますが、突然先生から電話がかかってきました。「今、慶應病院にいる。今日からしばらく入院することになった。ついては「学説史」の授業の代講をお願いした

^{*} 本稿は、2023年3月4日に慶應義塾大学三田キャンパス526教室で開催された退任記念講演（最終講義）の内容に加筆修正してまとめたものです。

い。シュマーレンバッハまで話したのでその続きをよろしく頼む」というのがその内容でした。入院されるという話はそのとき初めて聞きましたので本当に驚きまして、しばらく声が出ませんでした。「すぐに戻るから心配しなくていい」という先生の言葉に、ただ「わかりました」と答えるのが精一杯でした。

私は助手とはいっても、そのときはまだ博士課程に籍を置く学生でもありましたので、本来なら専門の授業をもつことはできないはずでしたが、恐らく非常事態ということで認めてもらえたのでしょう。そして先生の電話から数日後に初めて三田の教壇に立つことになったのですが、そのときの教室がこの教室の1階上にある532教室でした。

学部時代に先生の授業を受けていたときのノートが幸いにも捨てずにとってありましたので、それを参考にしながら自分では十分すぎると思える講義ノートを作って授業に臨みました。

ただ、初めての授業ということで緊張して少し早口になっていたのかもしれませんが。気がついてたら講義ノートは終わりに近づいていて、時計を見たらまだ30分しかたっていない。時間稼ぎの気の利いた雑談などもろんでくるわけではないですし、ハタと困りました。結局そのときはひたすら板書をして何とかその場をしのぎました。今のようなパワーポイントを使った授業ではなかなかできませんけれども、初めての授業にはそのような思い出があります。

恩師の小島先生は、9か月に及ぶ闘病生活の末、結局二度と教壇に立つことなく、54歳という若さで亡くなられてしまいましたので、532教室は私が大学教員として最初に授業を行った教室というだけでなく、小島先生が最後に授業をされた教室ということにもなります。

一方、本日のこの教室(526教室)は、私が今年度の経営学説史の授業で使っていた教室です。41年間の教員生活を振り返りながら最後の授業を行った教室です。最終講義をこのどちらの教室で行うかさんざん迷ったのですが、まだコロナが完全には収束していない状況を踏まえると、532教室よりも2倍広いこちらの526教室の方が密になりにくいということで、この教室で最終講義を行うことにした次第です。

さて、前置きが長くなりましたが、私の専門は「経営学方法論」「経営学説史」と呼ばれる分野で、とくにドイツの経営学説を中心に研究をしています。ドイツでは、経営学のことを「Betriebswirtschaftslehre」といい、直訳すると「経営経済学」となりますので、本日のタイトルも「経営経済学の方法と課題」としています。因みに経済学はドイツでは「Volkswirtschaftslehre」(国民経済学)と呼ばれ、経営学と区別されます。

経営学というと大抵の人は役に立つ実用的な学問というイメージをもっていると思いますが、私の専門は、その「役に立つ」というイメージからほど遠いせいか、なかなか理解してもらえないところがあります。

今日は最後の講義ですので、経営学方法論や経営学説史の研究の意味を私なりにまとめてお話しできればと思っています。少しわかりにくいところがあるかもしれませんが、経営学と経済学とはどう違うのか、というよく訊かれる質問に対して、現代科学論の知見に基づけばどう答えることができるのか、という話だと思ってお聞きいただければ、少しはご理解いただけるのではないかと思います。



退任記念講演会場（三田キャンパス西校舎526教室）の榊原研互教授
(2023年3月4日)



退任記念講演の様子

2. ドイツとの出会い、ドイツ語への関心

ところで、私がなぜドイツ経営学に関心をもつようになったのか、ですけれども、元々はドイツへの憧れのようなものがあり、それが出発点となっています。私は小学生の頃はどこにでもいる乗り物好きの子供でした。ただ、電車通学をしていたこともあって、鉄道にとくに関心をもっていました。友達の家遊びに行くと、どこの家にも鉄道模型があって、それが当時ブームだっ

たのか、あるいは友達に鉄道趣味の人間がたまたま多かったのかはよくわかりませんが、私も欲しくなって親にねだって買ってもらいました。どういう経緯でそうなったのかは覚えていませんが、それがメルクリン（Märklin）というドイツのメーカーの鉄道模型でした。

この企業は1859年創業といえますから、慶應義塾が創設された翌年に生まれた企業です。元々はドールハウス用のブリキの台所用品などのおもちゃを手掛けていましたが、鉄道の発達とともにいち早く鉄道模型の事業にも乗り出し、今や鉄道模型業界では世界最大手の企業となっています。とくにドイツでは知名度が高く、ドイツ人ならたとえ鉄道模型に関心のない人でもこの名前を知らない人はいない、そういう企業です。

メルクリンの製品は、世界中に愛好家がいって、レーガン元アメリカ大統領も熱心なコレクターだったといわれています。日本でも、元塾長の清家篤先生のご尊父であられる、建築家の清家清氏が愛好家であったことは、マニアの間ではよく知られています。

この模型、親子3代で遊べるというのを謳い文句にしているだけあって、作りも堅牢で、かつシステムとしての完成度も高いのですが、1つ難点があるとすれば、それは説明書の多くがドイツ語で書かれているということでした。この趣味は今も続いていますが、これがドイツ語やドイツの文化や歴史に関心をもつきっかけとなったのは事実です。

いつか勉強してドイツ語が読めるようになりたいと思っていたところ、進学した高校にドイツ語のコースがあるのを知り、迷わずそれを選択しました。このコースでは、1コマ50分のドイツ語授業が週7コマもあり、文法の基礎から徹底的に叩き込まれました。

ドイツ語を学び始めて間もなくして、ドイツ語受験を実施している大学があることを知りました。それも調べてみると、結構多くの大学で実施されていることがわかりました。慶應の商学部もその1つで、早速過去問を取り寄せてみてみると、少し頑張れば何とかなりそうな気になってきました。そこで一か八かドイツ語で受験したところ、幸運にも入学を認めていただくことができました。1976年の春のことです。

商学部のドイツ語受験制度は20年ほど前に廃止されましたので今はもうありませんが、その後ドイツ語受験で合格者が出たという話を聞きませんので、恐らく私がドイツ語受験で商学部に入學した最後の人間だと思います。

3. 小島三郎研究会への入会とドイツ経営経済学との出会い

大学3年生になると多くの学生はゼミに入るというのは今も昔も変わりませんが、その際、私はせっかくドイツ語をやってきたので、これを活かせるような勉強ができるゼミがいいと考えていました。そこで日吉でお世話になっていたドイツ語の先生に相談すると、「それなら小島先生がいい」と小島ゼミを強く勧めてくださいました。小島先生は研究者としても優れているし、人柄も素晴らしい、というのがその理由でした。

私は、小島先生の研究がどういうものかをまったく理解しないまま、ただその日吉の先生の助言にしたがって小島ゼミの門を叩き、ゼミの一員に加えてもらったのでした。

入ゼミ試験に合格したとはいえ、その後にはもう1つのハードルが待っていました。それが原書翻訳という課題です。これは小島ゼミに伝統的な課題で、英語の専門書なら300ページ、ドイツ語の専門書なら150ページを75日以内に翻訳して提出しなければゼミの正会員として認めない、というものでした。今振り返ってみますと、それは語学力をみることもさることながら、コツコツと日々の積み重ねができるか、その自己管理能力が試された課題だったように思います。

私はもちろんドイツ語を希望したところ、先生から与えられたのが、当時アーヘン工科大学の教授であったケーラー (R. Köhler) 氏の書いた『最近の科学論からみた経営経済学の理論体系』という本でした。

本の内容は、ドイツ経営学の代表的な研究者であるリーガー (W. Rieger) とグーテンベルク (E. Gutenberg) の学説を、新しい科学論・学問論の観点から検討するというもので、方法論研究といい学説研究といい何もかも私にとっては目新しく新鮮なものでした。ドイツ経営学というものに初めて触れた瞬間でした。

私は1985年から2年間、ドイツのケルン大学と慶應義塾大学との教員交換プログラムを利用してケルン大学に留学したのですが、偶然にも私が留学する少し前に、ケーラー教授がケルン大学に移ってきていました。そこで早速手紙を書き、ご著書を拝読させていただいた、ついでには経営学方法論に関心があるので受け入れ教授になっていただきたい旨お願いしたところ、快く引き受けてくださり、以後ケーラー教授が亡くなる2020年まで35年間にわたって親しくお付き合いをさせていただきました。慶應にも訪問教授として2度いらしています。

ゼミでの文献講読は科学方法論が中心でした。「若いときは哲学をやりなさい。経営学ならやる気になれば3日でできる」というのが小島先生の口癖でした。「さすがに3日では無理だよなあ」とそのときはゼミの仲間たちと話をしていたのですが、最近生協に行ってみましたら『大学4年間の経営学が10時間でざっと学べる』(高橋伸夫著、角川文庫、2017年) という本が平積みになっていまして、先生のおっしゃっていたことがまんざら誇張でなかったことを知りました。

それはともかく、難解な方法論が次第にわかるようになると、だんだん面白くなってきました。経営学は役に立つ実用的な学問と一般に理解されていますが、経営学に何がいえるかを科学の限界を踏まえながら発言することが責任ある研究者としての態度だとすれば、まさに科学のあり方を問う方法論的な議論は避けて通れない、きわめて重要なものだと思うようになったのです。

4. 経営学の2つの源流

ところで、ドイツ経営学ではなぜ方法論議が盛んなのでしょうか。それは経営学の成立の背景に深くかかわっています。

経営学には2つの流れがあるといわれています。経営学が学問として誕生したのは、今から100年以上前の19世紀末から20世紀初頭にかけてのことですが、アメリカとドイツでほぼ同時期に生まれました。ただ、成立の背景は著しく異なっていました。

まずアメリカについていいますと、アメリカは19世紀半ばにイギリスを抜いて世界一の工業国になります。そうした産業経済の急速な発展を背景に企業間の競争も激しくなり、生産性の向上や労働者の動機づけといった経営管理上の問題を解決するための知識が求められるようになっていきました。それが当時興りつつあったプラグマティズム（実用主義）の思想と結びついて、アメリカでは「役に立つ」経営学を志向する研究が進められていくことになったのです。

それに対してドイツはどうだったかといえますと、ドイツが産業革命を経験するのは19世紀半ばで、イギリスより100年後れていました。その意味で、当時のドイツは発展途上国だったわけです。そこでドイツ政府は、保護貿易政策などで産業の保護育成をはかる一方、先進国化政策の一環として商科大学設立運動を展開しました。これはこれからの産業社会を担うエリートの育成を目的としたもので、1898年にライプツィヒに商科大学が創設されたのを皮切りに、ドイツ各地に次々と商科大学が設立されました。そしてそこでの中心となる科目に据えられたのが経営学だったのです。

つまり、アメリカ経営学は現場（実務）の必要に迫られて生まれたのに対し、ドイツ経営学は国家の要請によって上から産み落とされた学問だったということです。

そのような事情から、ドイツでは早速論争がもち上がることになります。それは学問としての経営学をめぐるものでした。つまり経営学は金儲け論（Profitlehre）でいいのか、という議論です。

ドイツには、アカデミズムを重んじる伝統がありましたので、当時の社会的風潮には、経営や商業に関わる実用的な技法（いわゆるハウツーもの）を大学にもち込むことに強い抵抗がありました。そうしたなかで設立された商科大学は、商業経営に関するさまざまな知識の寄せ集めを教材にしていた、独自の体系的理論や研究領域をもっていませんでした。このことから経営学に対しては、その成立の当初から、「営利追求の学」、「金儲けの学問」、「資本家の御用学問」といった批判が投げかけられ、そのような学問は無用だとの議論が展開されることになったのです。

しかもこの時期、経済学は著しい発展をみていましたので、ドイツ経営学は経済学をはじめ隣接諸学科との関係において、自らの存在理由を明確に示す必要性に迫られることになりました。つまり、ドイツ経営学は、その生成と同時に「科学」としての存在理由を方法論的にいかに正当化するかという問題を背負わされたのです。

今日でも、経営学には経済学に匹敵するような理論、「これぞ経営学」と呼べるような理論基盤が存在していないことがしばしば指摘されます。経営学は、隣接する経済学や心理学、社会学から単に理論を借りてきて、それを組織や管理の問題に応用しているにすぎないというのです。

また、経営学の授業で学生からよく受けるのが、「経営学と経済学とはどう違うのですか」という質問です。経営学を担当されている先生ならば毎年のように訊かれているのではないのでしょうか。それにどう説得的に答えることができるか、が問われたのです。

こうした事情から、ドイツの経営学では、この学問のあり方をめぐってその後も繰り返し方法論争が展開されることになりました。

ところで、注意していただきたいのは、ここでいう方法論（methodology）とは、どうやって

データを収集し、収集したデータを（たとえば統計的に）どう処理するかという手続き論、手法論ではないということです。むしろここでいう方法論とは、知識が科学的と呼ばれるためにはどのような要件を満たさなければならないか、科学としての知識の身分、資格（客観性や正当性）はいかに保証されるのか、あるいは、科学をどう成長・発展させることができるのか、といった問題を扱う哲学の一分野ですので、この点誤解のないようにお願いいたします。

5. 経営学の存在理由を求めて

では、ドイツ経営学はその存在理由をどこに求めようとしてきたのでしょうか。

1つの試みは、学問の目的による差別化です。つまり、経営学を現象の因果関係を明らかにする理論的な科学として構想するのか、現実の問題解決を目指す技術学・応用科学として考えるのか、それとも経営のあるべき姿を示す規範的な科学として展開するのか、これによって経営学の独自性を明らかにしようという試みです。

しかし、これだけでは十分ではありません。というのも、同様の議論は経済学にも当てはまるからです。経営学がいくら理論的な科学だと主張しても、経済学も理論科学を志向すると主張されるならば、両者は十分に差別化できないことになります。

そこで人々が拠り所としたのは、当時（つまり20世紀の前半に）ドイツで影響力のあった新カント派の哲学でした。この新カント派の認識論とはリッケルト（H. J. Rickert）らによって19世紀後半に展開された哲学で、経験世界（私たちが日常経験する生の世界）は錯綜したカオスであり、丸ごとの全体を認識することはできないので、そこに観点（つまり切り口）を設定して現実の一面断面を取り出すことで認識が可能になる、という考え方です。つまり、1つの学問ではすべてを把握することができないので、ここに多様な学問が存在する理由、つまり学問の分業の理由があるということです。その意味で、学問の自立性、独立性は、独自の切り口をもつことによって保証されるといえます。

たとえば、同じ人間を考察するにしても、心理の側面からアプローチするのか（心理学）、社会的な役割行動など社会的な側面からアプローチするのか（社会学）、あるいは生理的な現象に注目するのか（医学）、によって多様な認識が生まれることになります。つまり、独自の観点と、その観点に基づく独自の対象をもつことが、学問の独立性を保証することであり、認識が一面的とならざるをえないところに科学の分業の意味があるということです。その意味で、切り口は、他に還元できないような独自性をもち、他と十分に差別化できるようなものであることが重要となります。

この観点の設定すなわち切り口のことを選択原理といいますけれども、この選択原理が異なると主張することで、経済学と経営学との違いが説明できると考えられたのでした。

こうしてドイツでは、経営学の目的、方法、対象を明示し、主題に関する知識を体系的に展開する研究スタイルが定着していくことになります。経営学の全体像を見渡すだけでなく、諸分野を統一的な視点から体系的にまとめることで、アカデミックな学問としての正当性が担保できる

と考えられたのです。

このような考え方にに基づきながら、単なる経営学の構想論ではなく、生産理論・費用理論という実質的な理論を展開したのがゲーテンベルクでした。体系性をもった経営学の総論的な議論を、ドイツでは「一般経営学 (Allgemeine Betriebswirtschaftslehre)」と呼んでいますが、ゲーテンベルクの理論は、その一般経営学の1つのあるべき姿を示すものとして注目を集めただけでなく、多くの支持を得てゲーテンベルク・パラダイムと呼ばれたほどでした。

しかしゲーテンベルクのアプローチがあまりに経済学的なものであったために批判も多く、1970年代になるとそれに代わるさまざまな一般経営学の構想が展開されることになります。一度まとまりかけたかにみえましたが、結局経営学の独自性の問題は解決が先送りされることになりました。

丁度そのころ、ドイツ経営学の方法論議に新たな波が押し寄せます。それが論理実証主義や批判的合理主義といった現代科学論に基づく省察でした。では、この現代科学論に基づく、学問の境界の問題、学問の独自性の問題はどのように解決されるのでしょうか。その議論をみる前に、科学あるいは学問の役割について確認しておきたいと思います。

6. 学問的知識と実践的知識

18世紀のフランスの思想家ルソー (J.-J. Rousseau) は、自らの教育論を説いた大著『エミール』のなかで次のように述べています。

「18歳になって人は哲学〔自然学〕で梃とはどういうものかを学ぶが、12歳の農村の子で、アカデミーのいちばんすぐれた機械学者よりもよく梃をもちいることができないような者はいない。」¹⁾

要するに農村の子ならば、たとえ大学で物理学など習わなくとも、学者よりはるかにうまく梃を使いこなすことができる、ということです。たしかに巷では、なまじ学問があるより現場でたたき上げられた人間の方がはるかに有能だとの声も聞かれます。私自身も経営学を教えていて、「経営学は本当に役に立つのですか」とよく訊かれます。理論を勉強したからといってすぐに役立つわけではありませんし、それだけで優れたマネージャーになれるわけでもありません。やはり現場を知らなければ一人前にはなれないわけです。

もしそうだとすると、大学で学問をする意味は一体どこにあるのでしょうか。学問の知識あるいは科学の知識 (学知) と実践の知識 (実践知) とはどう関係するのでしょうか。このような問を、私は経営学の最初の授業で学生たちに投げかけていますが、学生たちからは実に多様な答が返ってきます。この問には決まった答があるわけではありません。むしろ大学に身を置く者は学

1) Rousseau, J.-J. (1762), 邦訳 (上) 262頁。

生であれ教師であれ、1人ひとりが自分なりに考えてみるべき問題だと思います。

ただ、この問題に1つの見方を与えてくれるのが、アリストテレスの『形而上学』にある次のような言葉だと私は思っています。アリストテレスは古代ギリシャの哲学者ですので、ルソーのことなど当然知らないわけですが、次のように述べています。

「経験を積んだ人は、物事がこうであるということを知っているが、なぜそうであるかという²⁾ことを知らない」

私たちは何かを行う場合、「どうすればうまくいくのか」をあれこれ試行錯誤をしながら学習しますが、これはHow-toに関する知識だといえます。経験的な知識とはたいていこのようなものでしょう。しかし「なぜそれがうまくいくのか」を問うならば、私たちはもっとよい別の解決を見つけ出せる可能性があります。というのも、「なぜ」を問うことは理屈や道理を求めることに他なりませんし、それによってものごとの根本的な仕組みがわかるからです。そしてそれによって私たちは自分のこれまでの経験の檻から抜け出すことができるのです。

わが慶應義塾の創立者である福澤諭吉も「実学の精神」を唱えています。ここでいう実学とは、実践にすぐに役立つ学問という意味ではありません。むしろ福澤が「実学」に「サイヤンス」とルビを振り、その典型として窮理学（物理学）をあげたことからわかるように、実学とは理論と実証に基づく「科学」的知識の獲得とその応用のことを意味しています。福澤の言葉でいえば、「事物の真理原則を明にしてその応用の法を説く」のが実学ということです。

ところで、ルソーとアリストテレスでは2つの関心が問題になっていたといえます。すなわち1つがKnowing Howという実践的関心、もう1つがKnowing Whyという理論的関心です。実践的関心では目的手段関係（つまり目的に対する手段の適切性）が、理論的関心では因果関係（つまり原因と結果の関係）が問題となりますが、この両者の関係はどのように捉えることができるのでしょうか。よく理論を応用するとか技術的に利用するということがいわれますが、それは因果関係を目的手段関係に置き換えることを意味しています。つまり因果関係とは原因と結果の関係ですので、その結果を目的に、原因を手段に置き換えることで、実践的な命題が導かれることになります。これを工学的変換といいます。

たとえば、「価格を下げれば販売量が増える」という経済学の命題を考えてみますと、これは価格と販売量との間の因果関係を述べた命題です。価格を下げれば販売量が増えるのであれば、販売量を増やすためには価格を下げればいいということがここから導かれます。これが結果を目的に、原因を手段に置き換えるということの意味です。

しかし、価格を下げるということは販売量を増やすという目的のための唯一の手段ではありません。他にも広告を打ったり販売促進キャンペーンを行ったりということが考えられるからです。

2) アリストテレス（1959）、23頁。なお、わかりやすくするために表現を若干改めた。元の訳では「経験家の方は、物事のそうあるということ〔事実〕を知っておりはするが、そのなにゆえにそうあるかについては知っていない」となっている。

その意味で理論は1つの可能な手段を示しているにすぎません。また理論が発見されたからといって、それですぐに実践的な問題が解決されるわけではありません。理論を応用するには、その適用条件をめぐってさらに詳細な知識が求められるからです。ただ以上のことは、実践のためにも理論が必要なことを示しています。

以上のことをまとめると、科学には少なくとも3つの機能があるといえます。つまり、(1) 現象についての説明の機能、(2) 理論の技術的応用に基づくデザイン機能、そして(3) 社会に対する批判的機能です。

理論が十分に検証されたものであればあるほど説明は満足なものとなりますし、十分に検証された理論であればよりよい実践の基礎となりえます。また科学の知見は誤った常識から私たちを解き放つ力をもっています。「科学技術」という言葉が示すように。近年では科学の技術的応用の側面ばかりが強調されがちですが、科学の本来の使命あるいは役割とは、やはり真理による啓蒙、知による自己超越・自己解放にあるといっているように思います。

私がかつて学会で訪れたことのあるドイツのフライブルク大学の校舎には、「真理は汝らを自由にする」(Die Wahrheit wird euch frei machen.)という文字が刻まれています。この言葉はもともと聖書に由来するものかもしれませんが、これも真理を知ることによって経験を超越することができるという意味に理解することができます。

実はこの言葉は、わが国の国立国会図書館にも掲げられていまして、「真理がわれらを自由にする」というのがその言葉ですが、これは、国立国会図書館法案の起草に参画した人物が、ドイツ留学中にたまたまみた大学の銘文を参考にしたものだといわれています。フライブルク大学のそれであることは間違いのないでしょう。

しかし、学問の独立は研究の自由だけで保障されるものではありません。そのためには学問の自律が不可欠です。もし、学問の自律が客観的な真理を拠り所としているなら、研究倫理の遵守、研究成果の公表、検証手続の厳密性といった自律の要件が求められるといっているでしょう。その場合、科学方法論の課題は何かといえば、それは科学的知識の正当性をいかに保証しうるかを示すことにあるといえます。

これに関して現代の科学論はどのような主張を展開しているのでしょうか。次にみてみたいと思います。

7. 真理の探究と科学の方法

今日、科学論の分野では多様な科学方法論が展開されていますが、ここでは、現代科学論のなかでもその論理性、納得性という点で高く評価できるポパー (K. R. Popper) の批判的合理主義の考え方を中心にお話ししたいと思います。

一般に科学の方法というと、帰納法と演繹法を思い浮かべる人が多いと思いますが、帰納法が科学の標準的な方法であるという見解が定着したのは、ニュートン科学が成功を収めた18世紀以降といわれています。ここで帰納法とは、科学は経験とともに始まり、観察や実験によって得ら

れた経験事実を一般化することで理論や法則が獲得できるという考え方です。

この帰納法に問題があることを指摘したのは、18世紀のイギリスの哲学者ヒューム (D. Hume) でした。ヒュームは知識の身分の問題に関心をもち、私たちの諸々の信念のうちのどれを十分な理由によって正当化できるかを考えました。帰納の問題についていえば、かつて経験したことのある事例から、未だ経験したことのない事例を知ることができるか、を問いました。たとえば、これまでの経験から、明日も必ず太陽が昇るであろうと信じて疑わない人々の信念は正当化できるかといえば、その答は否です。反復の数がいかに多かろうとそれは正当化できない、というのがヒュームの答でした。なぜなら、それは有限から無限を推論することだからです。つまり帰納というのは論理的な飛躍があるために論理的には支持できないということです。結局、私たちの知識は非合理的な信念にすぎない、というのがヒュームの結論でした。

帰納をめぐるこのような議論に対して、まったく別の観点から解決を試みたのが、批判的合理主義の提唱者ポパーでした。ポパーによれば、ヒュームは帰納の問題を正しく指摘したにもかかわらず、その解決に失敗している。そしてその原因は、何よりも認識の心理学と認識の論理学とを混同したことにあるといいます。

ここでいう認識の心理学とは、「アイデアや理論が実際にどのようなプロセスを経て生じたのか」という「発見の文脈」に関わる問題であり、他方、認識の論理学とは、「知識の正当性・妥当性 (科学的知識としての資格・身分) はどのように保証できるのか」という「論証の文脈」に関わる問題です。

ポパーによれば、新しいアイデアや理論がどのようにして生じたかという問題は、心理学にとっては関心のあるテーマかもしれませんが、そのアイデアや理論の妥当性の問題とは何ら関係がありません。というのも、いくら知識の源泉を探求したところで、それが理論の真理性を保証するものではないからです。

たとえば17世紀にニュートンが打ち立てた古典力学 (万有引力の法則、運動方程式) は、その優れた説明力と予測力から、長らく絶対的な真理と信じられてきました。その時代、多くの哲学者の関心は発見の心理学——つまりニュートンはどのようにして絶対的真理に到達できたのか、その発見のプロセスの解明——に向けられていました。

ニュートン理論が真理だということを前提とすれば、発見のプロセスを探求する意味は十分にありました。しかし、20世紀になってアインシュタインが登場すると、ニュートン理論が誤りであることが明らかになりました。

このことはいくら発見のプロセスを探求したところで、理論の正しさ、真理性を保証できないということを意味しています。そうであるならば、理論の出所がどうであれ、ひとたび提案された理論が真か偽か、科学としての資格を満たしているかどうかをテストする手続きの方が本質的だということになります。

同様のことは、先に述べた新カント派の認識論にも当てはまります。その主張は、学問の独自性は固有の「切り口」をもつことによって保証されるというものでしたが、固有の切り口をもったからといって、そこから導かれる命題の真理性までもが保証されるわけではないことは注意す

べきです。

さらにいえば、観察には理論が先行しているといえます。これを科学論では観察の理論負荷性といいますが、たとえば虹が7色なのは、虹そのものが7色だからではなく、「虹は7色」という先入観があるからそう見えるのです。つまり、観察とは世界への能動的な働きかけだということです。そのように考えると、そもそも帰納というものは存在しないともいえます。

理論の真偽を確かめることができるためには、理論は何よりも経験的にテスト可能であることが重要となります。しかし、いくら検証事例を積み重ねたところで、理論の真なることを立証することはできません。一方、理論と矛盾する1つの観察命題の真なることから理論の偽なることを論証することはできます。

たとえば、「すべてのカラスは黒い」という命題を実証するためには、すべてのカラスを観察して、それらが黒いことを確かめなければなりません。現実には無限のカラスを観察することなど到底不可能です。私たちにできるのはせいぜい有限の観察ですが、有限の観察によって、無限についての主張の正しいことを証明することはできません。つまり理論の実証は不可能だということです。

それに対して、「黒くないカラスが存在した」という、理論と矛盾する観察事実が1つでも確認されれば、それによって理論の偽を立証することができます。なぜなら、「すべてのカラスは黒い」という命題は「黒くないカラスは存在しない」という主張と同義であり、もし「黒くないカラスが存在した」のが事実なら、理論はそれと両立できないからです。つまり、理論は反証はできても、実証はできないということです。

理論、すなわち普遍言明は、何かが存在しない、何かが起こらないことを主張する、「非存在言明」だということです。たとえばアインシュタイン理論は、「光速より速いものは存在しない」ことを主張しています。しかし、2011年にスイスで行われた国際共同実験で、ニュートリノが光速より速いという、相対性理論と矛盾する結果が出て話題となりました。検証の結果、実験装置に不備があったことがわかり、アインシュタイン理論の反証とはなりませんでした。もしこれが本当だったら物理学の世界は大きく変わっていたかもしれません。

以上のことを踏まえれば、理論が経験的にテスト可能ということは、すなわち理論が反証可能ということに等しいといえます。いい換えれば、「反証可能性」こそ、科学の境界設定基準としてふさわしいということです。そしてこの論証は、帰納の論理を一切用いることなく、純粹に演繹的推論の手段のみで行うことができるということです。

どんな知識も誤りうるという意味では、理論は暫定的な仮説以上のものではありません。したがって、その真偽を確かめるために、私たちは不断にテストを行う必要があります。その意味で、科学の方法とは批判的方法であり、理論が妥当性を主張しうるのは、せいぜい批判的なテストに耐えている間だけにすぎないといえます。

理論が仮説にすぎないならば、ある理論が「よりよい」（より説明力のある）理論に取って代わられる可能性が出てきます。これによって私たちは知識の前進としての認識進歩について語ることができるようになります。

ポパーは批判と知識の成長を「推測と反駁の図式」として、次のように表しています。

$$P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2 \dots$$

ここで P_1 は出発点となる問題を、 TT は暫定的な理論、 EE は誤り排除、そして P_2 は新たに生まれた問題を表し、この発展に終わりはありません。

以上の議論をあらためて整理すると、知識の発展にとって重要なのは、第1に批判的精神をもつこと、第2に誤りから学ぶ謙虚な態度をもつこと、第3に自由な批判的討論を可能にする開かれた場が制度的に保障されることだといえます。

因みに福澤諭吉は「信の世界に偽許多く、疑の世界に真理多し」と述べ、「多事争論」や「異説争論」の重要性を強調していますが、以上のことは福澤の思想とも相通じるものがあるといえます。

8. 学問の境界問題と経営学史研究の課題

さて、以上の議論を踏まえると、学問の境界の問題、つまり、たとえば経営学と経済学の違いは何か、といった問題にはどのように答えることができるでしょうか。これについてポパーは次のように述べています。

「主題とか物事の種類とかは、わたくしの考えでは、学問を区別する基盤にならない。学問が区別されるのは、一部には歴史的な理由や行政上の便宜（教育や任用の体制といった）という理由によるものである。（中略）しかし、かかる分類や区分は、どれも比較的つまらない浅薄な事柄である。われわれは何らかの主題（subject）の研究者なのではなく、問題（problem）の研究者なのである。そして、問題は、どのような主題や学問の境界をももろに横切³⁾って生じうるのである」と。

つまり、学問の区分は便宜的なものにすぎず、経営学とは何か、経済学とは何か、あるいは心理学とは何か、を議論することは生産的ではなく、むしろ重要なのは、その学問がどのような問題に取り組んでいるのかということだ、ということです。

というのも、「経営学の対象は何か」といったように、「…とは何かの問い（What-is? question）」は、結局のところ定義（＝言葉の約束）の問題であり、研究対象をいくら明確に定義したところで、対象についての新たな認識が生まれるわけではないからです。しかも、定義に言葉上の正確さを求めることは、無限後退や同語反復に陥って失敗するか、そうでなければ無定義語を用いなければならないことになり、結局曖昧さを免れることができないからです。

それに対して、問題とは矛盾を意味しています。たとえば、理論と観察との不一致や、2つの

3) Popper, K. R. (1963), 邦訳111頁。

理論の競合などがそれに当たります。そうした矛盾は「なぜ」という問題を提起し、私たちの知識を前進させる契機を与えてくれるものとなるのです。

先ほども述べましたが、よくいわれるように、経営学には経済学にみられるような核となる独自の理論的基盤がありません。経営学での議論は、そのほとんどが経済学ベース、心理学ベース、あるいは社会学ベースの理論を用いたもので、その意味で経営学は学際的な科学だといわれます。

その際、経営学に固有の理論がないことに引け目を感じてそのことを嘆く人がいますが、今までしてきた議論にしたがえば、そのようなことを気にする必要はもうまったくないということになります。

しかし、ここで重要となるのが歴史です。というのも、経営学がどのような学問かを知るためには、経営学がどのような問題を扱ってきたのか、そしてその問題をどのように解決してきたのかを知る必要があるからです。先に示した「推測と反駁の図式」にしたがえば、知識の発展は問題状況の変容の歴史として描くことができます。学問を知るとはまさにその歴史を知ることにはかなりません。そこに学説史研究の重要な意義と役割があると思っています。

最後に、私の好きなカール・ポパーの言葉を紹介して、この最終講義を締めくくりたいと思います。

「真理の探究は、われわれが明晰かつ単純に語り、不必要な専門語の使用や複雑化を避ける場合にのみ、可能である。私の意見では、単純性と明晰性をめざすことはすべての知識人の道徳的義務である」⁴⁾

ご清聴ありがとうございました。

参 考 文 献

- アリストテレス (1959)『形而上学 (上)』出隆訳、岩波書店。
- 平田光弘 (2011)「経営の“学”を考える」『経営哲学』第8巻1号 (2011年7月), pp.6-16.
- 梶脇裕二 (2009)『ドイツ一般経営学史序説——経営学の本質を求めて——』同文館出版。
- 永田 誠 (1995)『現代経営経済学史』森山書店。
- Popper, K. R. (1963), *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, London. (藤本隆志, 石垣壽郎, 森博訳『推測と反駁——科学的知識の発展——』法政大学出版局, 1980年)
- Popper, K. R. (1972), *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford. (森博訳『客観的知識——進化論的アプローチ——』木鐸社, 1974年)
- Rousseau, J.-J. (1762), *Émile, ou de l'éducation*. (今野一雄訳『エミール (上・中・下)』岩波書店, 1962～1964年)
- 榊原研互 (2006)「ナレッジマネジメントの可能性と限界——組織的知識創造理論の批判的検討——」十川廣國・榊原研互・高橋美樹・今口忠政・園田智昭著『イノベーションと事業再構築』慶應義塾大学出版会, 第2章 (pp. 39-80)。
- 榊原研互 (2009)「経営学の方法論的基礎づけ——批判的合理主義の適用可能性に関する一考察——」『経営哲

4) Popper, K. R. (1972), 邦訳53頁。

学』（経営哲学学会）第6巻1号（2009年7月）

榊原研互（2019）「科学哲学から見たイノベーション研究（小泉信三記念講座）」『三色旗』No. 827（2019年12月），pp. 16-30.

榊原研互（2020）「ドイツ一般経営経済学における方法論的問題状況——Chr. ユルミの所説を中心に——」『三田商学研究』63巻4号（2020年10月），pp. 35-46.

榊原研互（2023）「ドイツ経営経済学における学問の境界問題——シュライエグの所説を中心に——」『三田商学研究』66巻5号（2023年12月），pp. 19-29.

Schanz, G. (2014), *Eine kurze Geschichte der Betriebswirtschaftslehre*, Konstanz und München. (深山明監訳，関野賢，小澤優子，柴田明訳『経営経済学の歴史』中央経済社，2018年)



榊原研互教授 退任記念講演会の立て看板の前で